

高木復興大臣会見録

(平成27年10月14日(水) 13:37～13:47 於) 宮城県東松島市)

1. 発言要旨

今日、被災地であります石巻市、それから東松島市に入らせていただきました。両市とも市長さんに御同行いただいて、いろいろな話をお聞かせいただいたところでございます。

石巻市長からは、何といたってもやっぱり住まいの再建だということでございます。着実に進んではいるけれども、資材高騰の問題、あるいはまた、人材が少ない。そんなような話をお聞かせいただきました。公営住宅は、この2年がピークであると、しっかりと復興庁としても協力をというお話でございました。それから、もう一点、中心市街地の活性化というのも課題だという話をお聞かせいただいて、駅前を復興拠点として整備の御支援をしていただきたいという、そういう話でございました。話をお聞きする前に、今日は南浜地区の復興祈念公園、あるいはまた、土地区画整理事業の視察をさせていただいたところでもあります。また、新蛇田地区の災害公営住宅、防災集団移転事業の視察もさせていただきました。

東松島市におきましては、ご覧のとおり、この野蒜北部丘陵地区の視察をさせていただきました。1年半、2年弱ぐらいでしょうか、26年の3月だったかなと思いますけれども、当時、国交省の副大臣の時にも、まだ、まさにベルトコンベアーがどんどん、最盛期というのでしょうか、稼働していたころにお伺いをさせていただいて、久しぶりに来ましたが、市長さんを初め、多くの方の御努力で復旧、復興が進んだという感想を持たせていただきました。新しいまちづくりをしっかりと、住民の御希望も取り入れながらやっていたらっしゃるといふことに関して、心から敬意を表したいというふうに存じます。

東松島市長からは、仮設住宅を集約する際、災害公営住宅などに移るまでの間、市営住宅を活用するなど、工夫を図れないかという御提案、あるいは、河川堤防の話もございました。元に戻す復旧というだけではなくて、復興で整備したので、先日の豪雨が大丈夫だったということでございますので、やはりただの復旧ではなくて、本当に将来を見据えた形での復興というものが必要だということも感じさせていただきました。

また、これは復興局の方からの御説明でありますけれども、やはり今、非常に外国人観光客、インバウンド、全国的には増えている中であって、残念ながら、東北はまだ元に戻っていないということでございます。やはり多分に風評被害があるんだらうというふうに思いますので、そういった観光という面においてもしっかりと東北の皆さんに寄り添って頑張っていかなければならないというように思いをさせていただきました。

それから、先ほど訪れました石巻の公営住宅で、住民の方とも懇談をさせていただき、まさにこれからの復興、要するに心のケア、あるいはまた、コ

コミュニティの再生というのが非常に大切になってくると思いますけれども、ちょうど地域の皆さん方が集会所に集まられて、お歌などを歌ったり、あるいはお茶菓子などを食べて、お茶を飲んだり、談笑していらっしゃる所にちょうど出くわしましたので、せっかくですが、私もお邪魔させていただいて、唱歌というのでしょうか、「おぼろ月夜」という、もちろんほかにも何曲か歌っていらっしゃいました。私は「おぼろ月夜」をそうした方たちと歌わせていただいて、まさにコミュニケーションがとれたなという感じです。そこの方からは、非常に風が強いと。ですから、ドアをあけるのが大変なので、ぜひ少しドアの前の囲いというのでしょうか、フェンスというのでしょうか、そういったものを少し高くしてもらえないかと、そんなような御要請があったり、あるいはまた、今日ちょうど使っていた集会所ですけれども、いま一つ、何やら使い勝手がよくないんだと、もっと自由に使わせていただいて、こういったコミュニティの場を持つとうれしいというような話も聞かせていただきまして、早速、そういった対応、まずはどういう状況か、まずはしっかりとまた聞き取りなどをさせていただいて、どう対応できるのか、これから当局の職員に検討させたいというふうに思っているところでございます。

いずれにしても、今日訪問させていただきまされたけれども、やはり被災地の皆さん方に接する、そして、まさに寄り添っての復興庁の仕事というものが重要だということを感じました。3県の県知事さんにはお会いをしました。そして今日、2人の市長さん、そして住民の方にもお会いをしました。これからは極力現地に入らせていただいて、現場主義、被災地の方に寄り添って務めていきたいと思っておりますので、また御指導をよろしくお願いしたいと思っております。

以上でございます。

2. 質疑応答

(問) 今回、大臣就任されてから初めて被災地の住民の方々とお話、言葉を交わされたと思うんですけれども、改めて何かお感じになられたこと、これからどうしようという。

(答) やはりさっきの、何か御意見ございませんかと言ったら、意見じゃなくて、要望ですとか言って、女性の方がお立ちになりましたけれども、やはりどうしてもまだ口調がきつい口調、歌を歌った後でも、やはりちょっとまだ、ちゃんとやってよという、そういうのがやっぱりまだにじんできていたなというのが、もう率直な感想です。ですから、我々、頑張ってきて、何とかそういった住宅にも入っていただいて、快適に過ごしていただいているんだなというふうに自負を持っているわけでありましてけれども、一方で、4年かかったというような思いもあるでしょうし、入ったら入ったで、やはりなかなか不都合なところがやっぱりあったりして、いまだに御苦勞いただいているということが実感できました。ですから、先ほど来、申し上げているとおり、ま

さに被災地の方々の声をしっかり聞いてという思いであります。

(問) やはり今後も、そういう入居した後も必要になってくる、そういったハード面の対策もありますし、ソフト面の今後の対策も。

(答) そうですね。まさに心のケア、体のケア、それからコミュニティをやっぱりつくるということが一番大事だというふうに思います。市の職員の方が来て、ちょっとリードしていらっしゃいましたけれども、そういったようなことに対する支援などもこれから、心のケア、コミュニティを形成していく、そういったところにもやはり心していかなければならないんだろなということを感じました。

(問) 国土交通省の副大臣としても何度かこちらの現場を見られたかと思うんですけれども、最後に入られたときと比べて、まず、いつ最後に入られたのかというのと、あと比べてどうかというのをお聞かせください。

(答) 確か26年の3月でしたでしょうか、やっぱり場所によってちょっとイメージが違うような気がします。まだ少し遅れているなど思う感じもありますし、それはさりとて、今日拝見させていただいた住宅だとか、あるいはこの造成だとか、そういったところは大変進んでいるなどというふうに思います。もちろんこの鉄道も当然そうでありますし、まさに地元の県知事さん、あるいはまた首長さんに頑張らせていただいているなどと思いますし、また、一般市民の方々も大変厳しい環境の中で、よくぞ頑張ってきていただいたという思いがございます。いよいよ、もう半年ほどで5年でありますけれども、まだ半年ありますから、その間にでも、さらに被災地の方に復興の実感を持ってもらえるように、そしてまた、次のステージに希望を持って、被災地の方が臨んでいただけるような、そんなような復興庁の仕事をしていければいいのかなというふうに思っています。

(問) 現場主義というお話がありましたけれども、今後の視察、どれぐらいのペースでやられるか、そういった御予定はありますか。

(答) まだ確たることは申し上げられませんが、前大臣、竹下大臣は53週で四十数回来られたということでありますので、何とか、できれば、競争するわけではありませんけれども、やはりそれはいい結果を生むのであるならば、負けないように、とにかく頻繁に訪れたいというふうに思っています。

(問) 今日、住民と触れ合われて、大臣、率直に一番初めに何をすべきかということで、どう思われたかというところを教えてください。まず一番初めに、何を着手すべきかと思われたか。

(答) 今日お会いした住民の方は、もうその住宅に入っていらっしゃる方で、一応落ちついていてくださいますけれども、その中で、住宅ができたけれども、やはりまだちょっと不備なところがあるところを、ハードの面でも、そしてまた先ほど来、申し上げているとおり、本当の復興というのは、やっぱり建物ができて、そこに入るだけではなくて、そこで本当に生きがいを持って、将来を見据えて、生活をしていただく、それが初めての復旧復興だというふうに思います。あるいはまた、創生だというふうに思いますから、

今日お話をさせていただいた、その方たちを、初めて話をさせていただいて、
拝見させていただいて、そんなようなことを感じました。

(問) 現実的にはまだまだ仮設住宅にたくさん人がいて、災害公営もまだ半分
もできていない状況、これは遅れていると思いませんか。

(答) そういう見方もあるかもしれませんが、私はこれまで関係者の方が精いっぱい頑張ってきたというふうには評価をさせていただきたいと思
います。私もこれまで頑張ってきていただいた方々に負けないように頑張ると
いう、今、そういうような気持ちでございます。

(以 上)